

3. 寄稿1：東日本大震災 復興まちづくり支援を振り返って[宮城県気仙沼市] (元東京都職員 清水 正明)

宮城県気仙沼市を舞台に東日本大震災で被災した人々を描いた NHK 連続テレビ小説「おかえりモネ」が 10 月末で終わった。復興した街の風景を見ながら震災復興支援の延べ 6 年間（気仙沼市、岩手県庁、大槌町）を思い出し、印象の強かった気仙沼市の取組みを振り返る。

東日本大震災(平成 23 年 3 月 11 日)は、東京都の土地区画整理事業の出先事務所で遭遇した。同僚と徒歩で帰宅するなかで、地震規模から復興まちづくりの必要性を感じ、一年後、定年退職したら故郷岩手の復興に関わり貢献できればと思った。

その背景には、阪神淡路大震災を契機に都でも防災都市づくりとして木造密集地域の整備が重要となった。そこで、道路整備事業と沿道の住宅建替えを地元住民と一緒に進める仕組みを提案・実施した経験だった。

平成 24 年 9 月、東京都被災派遣職員(5 年任期)に採用され、多くの派遣職員とともに気仙沼市へ向った。単身赴任が多く、市で準備した岩手県内にある仮設住宅に被災者と一緒に住み、車通勤となった。



気仙沼大島ウィルカム・ターミナルからの夕日
今回「おかえりモネ」の舞台となり、現在、
橋梁が整備済み。(整備中の写真を掲載)

担当業務は、被災者の住居確保のため、山間部などに宅地造成する「防災集団移転促進事業」及び「災害公営住宅整備事業」の事業実施でした。

最初の仕事は、被災者一人ひとりに電話し「意向確認」するのですが、土地勘もなく、事情もわからない状況での対応で、皆様には大変ご迷惑をかけたと思います。その意向を考慮して、高台の安全な場所に「宅地造成工事」を実施。そのためには、計画策定（予算確保）、行政手続き（都市計画法の開発許可）、工事発注、工事調整、工事監督を行うこと。誰も経験がなく不安なスタートでした。

当時の状況は、被災後の瓦礫処理や生活再建の工事が中心で、工事用ダンプで国道 45 号（幹線道路）が大渋滞。とても復興事業を開始できるとは思えないなかで、先行地区で用地確保が進み工事着手が目前となりました。このような状況では人員や建設機械の確保、資材調達など、受注者（施工業者）側に工事の道筋を示して貰い、発注側（気仙沼市）が審査し決定するのがベストと考え、「プロポーザル方式」を工事発注に導入した。

しかし、山間部での造成工事は、当初予定した問題だけでなく、工事用道路確保、掘削土の仮置場・処分先、盛土材の調達などの課題山積。その打開に向け市職員、派遣職員、コンサルタ

ント、施工業者で協議後、関係機関とも調整し、以下のことを段階的に進めた。

- ① 市内約 50 か所に点在する宅地造成や約 450 万㎡の土砂運搬を計画・実施するため、ダンプ車約 1,000 台を全国から調達。
- ② 盛土・残土処分のため、三陸復興道路(国土交通省)、農地復旧(宮城県)など関係機関の協力を得て進めたが、それでも残土が発生し、隣接する南三陸町や岩手県内まで運搬処理。
- ③ 一時土砂置場、工所用道路の用地は、地元住民の協力を得て借地で確保。

このような『土砂との闘い』が事業進捗に影響しただけでなく、開発手続き、森林伐採等、関係者の協力・調整により、宅地の早期引渡しが可能となった。その要因は、新たな課題が発生した時、職員間で相談し対応できる体制と元公務員、元大手ゼネコン、元コンサルタントなど豊富な経験を有する職員の協力だったと思います。

多くの派遣職員は、定年退職後、「復興に貢献できればとの思い」だけで、単身で仮設住宅に住み、様々な難題に取り組んでいた。ところが二年目頃から体調不良で辞める職員が多くなり、私も三年目の冬、体調不良でダウン、気仙沼市を去ることになりました。

その後、東京都の意向もあり、家族と一緒に暮らしながら復興支援ができる岩手県庁で市町村施行の復興土地区画整理事業の支援を行い、5 年間の復興支援に携わった後、心臓手術・リハビリテーション後、令和 2 年 3 月まで大槌町任期付職員（1 年間）となり復興支援を行った。

現在（東日本大震災から 10 年目）は、住宅、商店街、工場等が再建され、防潮堤や公園も整備できた。更に令和 3 年 12 月には、復興道路（三陸沿岸道路仙台～八戸 359Km）が全線開通のことです。既に、気仙沼市では、復興道路の「気仙沼湾横断橋(東北最長の斜張橋)」が開通し、「おかえりモネ」の舞台となった気仙沼大島を橋で結ぶ「気仙沼大島大橋（鶴亀大橋）」も整備済みです。

今も被災地には、防潮堤や被災した未利用地（災害危険区域）の活用及び空宅地の利用等の課題があります。例えば、以下のような『SDGs』の視点で考えると、

- ① 防潮堤法面に太陽光パネルを設置し自然エネルギーネットワーク構築。
- ② 災害危険区域に「脱プラスチック」や「木造建築材」の研究・工場・貯木場の整備。
- ③ 空宅地はこのような産業振興と連動し、空宅地の土地利用転換促進。

このような取組みを推進し、『自然環境に優しい未来の街が誕生すれば素晴らしい』と、三陸沿岸の綺麗な海を見ながら思っています。



気仙沼市市南町の割烹料理店ランチ（海鮮重）
（カツオ、マグロ、ウニ、タコ・・・）

派遣時、お店は仮設商店街内にあり「海鮮重」を頂きました。（思い出の一品です。）

復興支援を終えた今でも、自宅（岩手内陸）から復興支援道路・三陸道路を通り「三陸の幸」を楽しんでいます。☺